

分断を乗り越えて

松井 久子

新しく迎えた2016年は、いよいよ4月から「女性活躍推進法」が全面施行される。女性の雇用促進と就労環境の改善のための法律。一見、たいへん喜ぶべきことのようにだが、その法律で私たちは本当に幸せになれるのか?とってしまう。

政府は「2020年までに女性管理職を30%に」と魅力的な数値目標を掲げるが、昨年公表されたデータによると、男性の非正規社員が22%に対し女性の非正規は57%。それが現実だ。女性に光が当たる政策と思わせながら、実際は弱者の切り捨てと女たちの分断がますます進むのではないかと心配になる。

政治は私たち一人ひとりの生活と密接につながっている。30%の輝く女性を生み出すために、70%の弱者が置き去りにされていいわけではない。そんなことを考えながら、昨年つくった映画「何を怖れる フェミニズムを生きる女たち」の上映会で全国をまわっている。どこに行っても気づくのは、世代を問わず、映画を見ながら涙する人がこんなにも多いのか、ということだった。常に弱者の側の女たちのために心をくだき、活動や研究をしてきたフェミニストたちの、「もっとつながろう」という言葉に思わず泣いてしまう女たちがいることを、法律をつくった人たちはどれだけ知っているだろうか?

長い間、フェミニストと普通の女たちは、ガラスの壁で隔てられてきた。家庭環境や教育、社会構造によって、日々の生き難さを己の内に抱え込み、「NO」と言うにも怖れを抱く女たちは後をたたない。が、「私はフェミニストではない」とうつむいていた彼女たちが、映画に登場する先輩フェミニストたちの、老いてもなおきらきらと美しい顔を見て、力強い言葉を聞いて、「なあんだ、怖れなくていいんだ」と、最後は元気を取り戻して会場を出ていく。そんな姿を見るたび思うのである。「格差が広がるばかりの今こそ、男も女も、互いの立場の違いを乗り越えて、つながり合い、声を上げるときではないか」と。



PROFILE

まついひさこ：映画監督。早稲田大学文学部演劇科卒。雑誌ライターやテレビ番組のプロデューサーを経て、1998年「ユキエ」で映画監督デビュー。その後、「折り梅」「レオニー」に続き、2015年1月には、日本のフェミニズム運動の歴史と現在も続く女たちの活動をまとめたドキュメンタリー映画「何を怖れる フェミニズムを生きる女たち」を公開。『松井久子の生きるカソリストの思考術』（六耀社、2011）など、編著書多数。